

閱讀自然書寫作品《苦海淨土》

—探究與所謂近代之魔性格鬥、第三選項的可能性—

曾秋桂

淡江大學日本語學科教授

摘要

本論文沿用近年常用之於探討自然與人類關係研究方法之自然書寫(nature writing)，特別注意到自然書寫中最被重視之「場域感」的表率「故鄉」觀點。於是將「故鄉」分成「空間」(space)、「場域」(place)、「歸屬地方」三個幾何圖騰(topology)，來考察《苦海淨土》(全3卷)。

考察結果顯示：《苦海淨土》中的故鄉書寫，逐漸地具備了「空間」、「場所」、「居場所」幾何圖騰，為一多層次的結構作品。一般認為的文明批判者、反近代思想家石牟禮道子形象，在作品中的確是存在。但同時可以窺得石牟禮道子將日本自古流傳的說話、民話、詠歌為土壤，深陷洞察何謂近代之苦鬥當中。亦確認出石牟禮道子內心深處意欲回歸日本風土精神。

特別值得一提的是石牟禮道子在面對近代技術、文明，不是以反近代來使其相對立，而是採取以日本原古文明當作第三選項來思考。由此觀之，邁克爾·楊(1915-2002 Michael Young)主張「任人唯賢菁英主義」(Meritocracy)所述一般，相較於僅止於批判「近代」的發想而尚未提出定論的歐美，《苦海淨土》中描繪與所謂近代之魔性的格鬥、第三選項的可能性，可以認為搶頭香之功績。

關鍵字：自然書寫、《苦海淨土》、故鄉、所謂近代之魔性、第三選項

受理日期：2017.03.10

通過日期：2017.05.05

A reading of “Kukai Jodo” as a Nature writing: The possibility of the grapple with the devilism of modernization and the third clause recognition

Tseng Chiu-Kuei

Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

In this research, the Nature writing as a method which studies relation by nature and a human being in culture is used, its hometown as feeling of a place is divided into three topologies; a space, a place, and a living room, and “Kukai Jodo”; all the 3 copies is considered.

As a result, “Kukai Jodo” has a space, a place, and a living room and has multilayer structure. The writer image as the civilization critic and an anti-modern-idealist who says with generalizations can also be found out. On the other hand, the writer is going to see into the essence of modern times using a narration, a folktale, the Buddhist chant from Japanese ancient times. It is recurrence to the Japanese-style mind climate which rooted in a heart.

The writer has tried to regard original civilization of Japan against modern technological civilization and anti-modern ideas as a key which conquers a third clause that is the origin of this 2 clause confrontation. Like a meritocracy theory of Michael Young (1915-2002), the criticism to the essence of modern times as the idea still just began in Europe and America. “Kukai Jodo” has presented the grapple with the modern devilism, the recognition of the third clause as the origin of confrontation with nature and man, and the possibility of the conquest. This works are very pioneering achievements in the Nature writing.

Keywords: Nature writing, “Kukai Jodo”, hometown, modern devilism,
third clause

ネイチャーライティングとしての『苦海浄土』の読み —近代という魔性との格闘と第三項認識の可能性—

曾秋桂

淡江大学日本語学科教授

要旨

近年注目を集めている、文化的に自然と人間との関わりを研究する方法としてのネイチャーライティング(nature writing)を援用し、その中で重要視された「場所の感覚」としての「故郷」を、「空間」(space)、「場所」(place)、「居場所」の3つのトポロジー(topology)に分け、『苦海浄土』(全3部)を考察した。

その結果、『苦海浄土』は「空間」、「場所」、「居場所」を兼ね備え、多層性を持っているが、一般論で言う文明批判者、反近代思想家としての石牟礼道子像が確かにある一方、日本古来からの説話、民話、詠歌をバネに、近代とは何かを洞察しようとした石牟礼道子の格闘があることが明確にされた。同時に、心に根付いた日本精神風土への回帰もあることも確認された。

とりわけ、石牟礼道子が近代技術文明と反近代思想に対して、日本の原文明を二項対立を産み出す第三項を克服する鍵として捉えようとした点は注目される。マイケル・ヤング(1915-2002 Michael Young)のメリトクラシー論のように欧米でも発想としての「近代」への批判は、未だ途についたばかりである中、『苦海浄土』で描かれた近代という魔性との格闘と自然と人間の対立の根源となる第三項認識と克服の可能性は、きわめて先駆的な業績とも言えよう。

キーワード：ネイチャーライティング、『苦海浄土』、故郷、
近代という魔性、第三項

ネイチャーライティングとしての『苦海浄土』の読み¹ —近代という魔性との格闘と第三項認識の可能性—

曾秋桂

淡江大学日本語学科教授

1. はじめに

日本で有名な小説家池澤夏樹が編集した『世界文学全集』（全 30 巻、河出書房新社）に、日本文学作品としては、川端康成、大江健三郎、村上春樹の作品ではなく、石牟礼道子『苦海浄土』だけが取上げられ、第三集(2011)としてその列に加えられることになった。

岩岡中正は、公害の告発文学として知られた『苦海浄土』の作者石牟礼道子を文明批判者、反近代思想家としている²。石牟礼道子は、一主婦として水俣病に苦しむ故郷の水俣市(九州熊本県)漁村の現状に目を向け、1969年に『苦海浄土—わが水俣病』(以下、『第1部』と略す。)を発表し、以後『苦海浄土・第2部「神々の村」』(2004、以下『第2部』と略す。)、『苦海浄土・第3部『天の魚』』(1974以下『第3部』と略す。)を加えて、『石牟礼道子全集』第二巻、第三巻に掲載し、その完成を見せてくれた。渡辺京二の指摘では、1970年9月から1989年にかけて、『第2部』は『辺境』に掲載されたが、中断を挟んだ『辺境』の終刊によって、未完のままに終わり、単行本となる機会もなかった。2004年4月から『石牟礼道子全集』の刊行をきっかけに第2部の最終章「実る子」の後半を書き上げて、30年数年にわたる懸案の仕事ようやく決着をつけたという³。この3

¹ 本論文は参考文献に掲げた、拙作「生態文学論述中與故郷的溝通—以探討石牟礼道子《苦海浄土》為主—」(『日本論叢』31P85-106 淡江大學日本語文學系)では『苦海浄土』の第1部、(2016)「ネイチャーライティングの観点から読み解く石牟礼道子『苦海浄土』—故郷との対話を中心に—」(『比較文化研究』124 日本比較文化学会)では『苦海浄土』の第2部を考察した成果を踏まえた上、『苦海浄土』第3部を分析、考察し、全3部を総纏めたものであることをここで断っておく。

² 岩岡中正「石牟礼道子における文明と社会—『天湖』を中心に—」(2003)『九州法文学報』P19

³ 渡辺京二(2013)『もうひとつのこの世』弦書房 P163

部によって出来上がった『苦海浄土』では、各部が書かれた時期・背景が違っているため、それぞれの特色を持っているが、『第2部』については、「『苦海浄土』三部中、要の位置を占める作品というべきである」⁴と渡辺京二は高く評価している。

近年、文化的に自然と人間との関わりを研究する方法として、ネイチャーライティング(nature writing)がよく使われている。ネイチャーライティングでは、「場所の感覚」が重要視されている。通常なら、人間がこの世に生を享けて最初に触れた場所が「故郷」とされ、人間はそこに対して特別な感じを抱いている。本論文では、その故郷を「空間」(space)、「場所」(place)、「居場所」の3つのトポロジー(topology)に分け、ネイチャーライティングの観点から、故郷との対話に焦点を当てて今まで究明してきた石牟礼道子『苦海浄土』第1部と第2部の結果を踏まえ、創作時期が隔たったことで内容的には断絶があったとしても、完成した『苦海浄土』全体を概観することにする。ちなみに、石牟礼道子がかつて「自分のこころのなかにある世界というのは、(中略)それぞれの故郷というものがある。私の場合、すべてのことが水俣に凝縮されるわけですが」⁵と触れたように、『苦海浄土』における故郷像の多層性が指摘されている。石牟礼道子が作品の世界を故郷と位置づけている以上、ネイチャーライティングの観点を『苦海浄土』に応用する有効性は疑えないであろう。

手順としては、まずネイチャーライティングの定義を確認し、その起源と系譜を回顧し、その特徴を説明する。次に、ネイチャーラ

⁴渡辺京二(2013)『もうひとつのこの世』弦書房 P163 では、「『第二部』は水俣病問題の全オクダヴ、その日常と非日常、社会的反響から民俗的底部まですべて包みこんだ巨大な交響楽といってよい。水俣病とは何であったか、そのことをこれだけの振幅と深層で描破した作品はこの『第二部』以外にこれまでもこれからもあるはずがなかったその意味では『第二部』は『苦海浄土』三部中、要の位置を占める作品というべきである」と指摘した上、下した評価である。

⁵それは1973年12月に刊行した『潮』に掲載した上野英信と交わした対談に触れた言葉であり、現に「『苦海浄土』来し方行く末」(2004)『石牟礼道子全集・不知火第三巻』藤原書店 P517 に収録されている。

イティングにおいて重要視された「場所の感覚」の特徴を参照しながら、考察対象とした『第3部』を分析する。最後に、『第3部』の故郷像を、『第1部』、『第2部』で得た結果と対照比較しながら、説明を進めていく。

2. ネイチャーライティングの定義、起源、系譜、特徴

ネイチャーライティングの定義、起源、系譜、特徴の援用については、既に幾度か触れたことがあるので、本論文では、簡単にそれに触れるにとどめることにする。

2.1 ネイチャーライティングの定義

英語の「nature-writing」を語源としたネイチャーライティングの定義は様々だが、自然と人間との関わりが最大公約数的に見られる。諸説を融合した加藤貞通は、「一般に、自然と人間との関係を主題とするノンフィクション、エッセイを指す。自然・環境を扱う野外ガイド、日記や紀行文、科学的または哲学的・文明論的考察、ドキュメンタリー映画なども含まれる。“ネイチャーライティング”と、詩や小説、演劇など従来の文学ジャンルの自然・環境に関わる著作とを併せた、より広い範囲をさす“環境文学”(environmental literature)という用語は欧米の大学の科目名などにおいても使用され始めている」⁶と指摘したうえ、現状を踏まえて、「ネイチャーライティング/環境文学は、そういう意味での自然界とのコミュニケーション回復を目指す文学である。人間による収奪的利用(植民地化)が一層深刻なりつつある自然界の健康と、その一部としての身体健康をいかに回復するのか、今すべての人が問われている」⁷と説明している。本発表では、加藤貞通の説に従い、人間と自然との関係を主題に自然界とのコミュニケーション回復を目指す幅広い範囲を含む文学創作を「ネイチャーライティング」と定義することにす

⁶加藤貞通(2007)「環境文学入門：自然とのコミュニケーションを回復する」『メディアと文化』第3号名古屋大学大学院国際言語文化研究科 P107

⁷前掲加藤貞通論文 P110

る。

2.2 ネイチャーライティングの起源と系譜

松岡幸司によると、ネイチャーライティングの起源は「18.19 世紀にさかのぼ」⁸り、「ヘンリー・ディヴィッド・ソローの『森の生活』のスタイルを伝統の一つとして発展している」⁹という。また、加藤貞通は発祥地及び学会発足地の「アメリカのネイチャーライティング/環境文学を特徴づけるもののひとつは、ウィルダネス(wilderness)の概念である」¹⁰と指摘している。この概念は、19 世紀から 20 世紀にかけて「否定的な意味合いから肯定的な意味合いに変化し」¹¹た。「近代ネイチャーライティングのスタイルを確立した」¹²と言われた H.D. ソローが書いた『ウォールデン』は、「エコロジーの古典とみなされ、この作品にならって「ネイチャーライティング」という環境文学の一分野も生まれている」¹³という。

ネイチャーライティングの系譜については、篠田知和基はネイチャーライティングを「ソローのタイプの自然賛美、あるいは自然体験と、「苦界浄土」(正しくは「苦海浄土」・論者注)のタイプの公害告発とを含む」¹⁴と明確に指標を設けて分類している。ネイチャーライティングは、大きく H.D. ソロー(Henry David Thoreau 1817-1862)が『ウォールデン』(1854)で讃えた自然賛美¹⁵あるいは自然体験と、

⁸松岡幸司(2011)「1842年7月8日の日蝕」：翻訳と解説—ネイチャーライターとしてのシュティフター」信州大学人文社会科学部研究会編『信州大学人文社会科学部研究』第5号 P142

⁹前掲松岡幸司論文 P142

¹⁰前掲加藤貞通論文 P108

¹¹前掲加藤貞通論文 P108

¹²荒井宏祐(2007)「J. J. ルソーにおけるネイチャーライティング(環境文学)」『文教大学国際学部紀要』第17巻2号文教大学 P16

¹³中島邦雄(2007)「環境文学の系譜—D. H. ソロー、H. パーシェ、石牟礼道子—(1)」『かいろす』45号 P72

¹⁴篠田知和基(1999)「環境文学から見たフランス文学」『古屋大学文学部研究論集文学』45号名古屋大学文学部 P247

¹⁵前掲中島邦雄論文では、H.D. ソローを「彼は反人間中心主義者というよりも、むしろ人間中心主義者だったのであり、人間を啓蒙するために、つまり結局人間のために作品を書いたということが出来る」(P81)とし、「H.D. ソローがほとんど無意識のうちに、人間中心主義的なモラリストと反人間中心主義的なナチュラルリストとの間を自由に行き来できたのはそうした事情による」(P85)と分析している。

石牟礼道子(1927-)が『苦海浄土』(1969)で訴えた水俣病などの公害の告発の2種類に分かれると見てよい。

2.3 ネイチャーライティングの持つ特徴

ネイチャーライティングの特徴について荒井宏祐は、ネイチャーライティングには、「場所の感覚」、「環境問題文学との関連」、「交感と表象」の3つの特徴¹⁶があるとしている。その「場所の感覚」(sense of place)を、野田研一は「アイデンティティの獲得や再確認」、「生態系につながる存在としての自己及びその豊かさや危機と自己との関係の知覚」、「近代社会の知性に圧迫された自己の生の再確認」¹⁷の3つに細分化している。そして、「環境問題文学との関連」については、杉野元子はネイチャーライティングを、「人々の大自然に対する愛と環境悪化に対する憂慮を喚起する文学」¹⁸として捉えている。また、野田研一は、「交感(correspondence)と表象」については、「人間と自然の間に何らかの対応関係を読みとる思想を動かす原理」¹⁹を「交感」とし、「雪や馬といった自然物が代行=表象的に指示するその「内的諸事実」=意味に焦点を合わせている。このときこそ、雪や馬が象徴として機能するときにはほかならない。その際、自然物という外的諸事実はいかにもエマソンの意味合いにおいて、「透明的」な存在と化している」²⁰と「表象」についての説明をしている。

2.4 重要視された「場所の感覚」としての故郷

「場所の感覚」としての故郷には、「空間」、「場所」、「居場所」の3つの位相がある。山里勝己は「場所の感覚」を究めたスナイダーの学説を、「壮大な枠組みの基盤となるべき概念」²¹と位置づけた。こういった概念は、環境文学やエコクリティシズム文学研究、環境

¹⁶前掲荒井宏祐論文 P14

¹⁷野田研一(2003)『交感と表象』松柏社 P113-114

¹⁸杉野元子(2001)「現代中国の環境文学」柴田陽弘編『自然と文学 環境論の視座から』慶応義塾出版会 P262

¹⁹前掲野田研一著作 P19

²⁰前掲野田研一著作 P78

²¹山里勝己(2006)『場所を生きる-ゲーリー・スナイダーの世界』山と溪谷社 P123

思想、環境運動に多大な影響を与える金字塔だ²²と喜納育江は、再三に強調している。その中で、「空間」(space)と「場所」(place)との差異がよく注目される。山里勝己の説明によれば、人間がその中を移動する枠組みを示唆する「空間」に対して、「場所」は人間の定住する生活を暗示し、そこでアイデンティティが形成され、帰属感や職業が獲得される²³という。さらに、喜納育江は「空間」と対比された「アイデンティティのある場所」の意味を深めて、「その「場所」の共同体、特に同じ人間である他者との関係の中でアイデンティティが意味をもつことを強調する表現」²⁴を「居場所」と言い、認識論と存在論から「故郷」と結びつけた。

従って、上述の「場所の感覚」の視点から、『第3部』の故郷像を明らかにし、さらに『第1部』、『第2部』で得た結果と対照比較しながら、その解明に努めることにする。

3. ネイチャーライティングとしての『苦海浄土』の試論

前述のように、『苦海浄土』は第1部、第2部、第3部によって構成されたが、作家石牟礼道子が「第三部『天の魚』を先に書き、第二部を放り出すとはみっともない話だ」²⁵と表明した如く、創作時間は必ずしもこの順番によって書かれたものではない。それにしても、全集に組まれた以上、一つの作品として順番に読み解くべきものとし、その内実を明らかにすることにする。

3.1 『第3部』の詳細

『第3部』は、序詩を除いて「死都の雪」、「舟非人」、「鳩」、「花非人」、「潮の日録」、「みやこに春はめぐれども」、「供護者たち」の7短篇によって構成されており、1971年暮れから水俣病関係者が故

²²喜納育江(2011)『<故郷>のトポロジー—場所と居場所の環境文学論』水声社 P18

²³山里勝己(2011)「地名の詩学—『アメリカ』の地理表象をめぐって」野田研一編『<風景>のアメリカ文化学』ミネルヴァ P20

²⁴喜納育江(2011)『<故郷>のトポロジー—場所と居場所の環境文学論』水声社 P22

²⁵石牟礼道子「あとがき」(2004)『石牟礼道子全集・不知火第三巻』藤原書店 P590

郷水俣を出発し、1972年元旦から始まり、1973年の3月に熊本地裁が被告チッソの企業責任を認めるまでの東京座り込み抗議活動が主に描かれている。『第1部』(7短篇収録)、『第2部』(6短篇収録)と同じように、殆どは第1人称の視点で語ったものだが、「舟非人」、「花非人」では主に水俣病患者が語った物語に重点が置かれて、語り手が聞き手になっていると同時に、「わたしども」、「わたしたち」、「わが魂」、「わが手」、「わが身」の使用が増え、水俣病患者との絆が強調されている。詳細は以下の通りである。

『第3部』に収録された作品を語り手、主題、引用のように分けて整理すると、下記の表(1)のようになる。

表(1)『第3部』の詳細

	語り手の表記	主題	引用
第一章 「死都の雪」 (P9-48)	わたし(P9)/ わたくし (P10)/わたし たち(P12)/わ たしくしども (P15)/道子 (P16)/わが身 (P30)/石牟礼 さん(P48)	1. チッソ東京本社座り 込みの抗議活動 2. 細川博士の死 3. 胎児性水俣病の子た ち 4. 果せなかった細川博 士夫婦との約束	ガリビラ、 抗議文、患 者と市民 との対話、 『詩経』、 注意書き、 記録映画 『水俣』
第二章 「舟非人」 (P49-74)	水俣病患者の 自称(田舎人 のわたしたち (P50)/わたし (P51)、わたし ども)	水俣病患者漁師江郷下一 美一家の物語	歌(子守 唄)
第三章 「鳩」 (P75-184)	わたし(P75)	1. 東京座り込みの抗 議活動 2. 認定対象から外され た水俣病患者たち	患者金子 直義につ いての資 料、県議 会会議抄 録、弁明 書、契約 書、『わ が死民』 からの抜 粋、対面 記録
第四章 「花非人」 (P185-199)	水俣病患者の 自称(わたし たち(P186)/ わが魂 (P186)/わが	水俣病患者患者溝口良次 の物語	

	手 (P189)/ わたしども (P190)/ わが身 (P196))		
第五章 「潮の日録」 (P200-263)	わたくし (P217)/ わたくし (P263)	1. 東京座り込みの抗議活動 2. チッソとの会談 3. 座り込みにいたる経過とその反響	補償処理委員会実地交渉抄録、ビラ、水俣市を明るくする市民連絡協議会結成大会
第六章 「みやこに春はめぐれども」 (P264-292)	わたし (P265)/ わたくし (P267)	東京交渉に出る直前になくなった小崎弥三	坐りこみ闘争宣言、申入れ書、詠歌
第七章 「供護者たち」 P293-405	わたし (P295)/ 道子さん (P297)/ わたくし (P402)	1. 東京座り込みの抗議活動 2. 前近代風景 3. 熊本地裁のチッソの有罪判決 4. 判決自主交渉派と訴訟派の分裂、統合 5. 水俣病患者小道老人の死	『梁塵秘抄』、『風土記』、『日刊恥ツ素』、告発狂歌、水俣病裁判の判決、チッソ社内の資料、申請人らの反論書、調査令状、水俣病訴訟弁護団と訣別する表明書、誓約書、要求書

表(1)のように、報告書などを引用した『第1部』、『古事記』²⁶、民話、仏教説話、詠歌などを取り入れた『第2部』に対して、『第3部』では、古今対比を通して、近代化による日本の弊害に関わるに文明批判及び自然尊重を述べている。『第1部』より近代批判が強ま

²⁶『石牟礼道子全集・不知火第二巻』藤原書店 P294 では、「然れども、くみどに興して生める子は、蛭子。この子は葦舟に入れて流して去てき。次に淡島を産みき。こも亦、子の例には入れざりき。(中略)胎児性の子をひとりならず二人も産み落とした母親たちがいる」とあり、産み損なった子を捨てた話に触れている。

った『第2部』では、その背後には、『古事記』、民話、仏教説話、詠歌などによって支えられた故郷への思いがあると見られる。故郷に触れた箇所が一番多い『第2部』の「花ぐるま」で触れた「人のこの世は永くして」と言った詠歌は『第3部』にも登場している。『第2部』で死者を慰めるものとされたこの詠歌からは、水俣病によって命を失ったものへの暖かい語り手の眼差しがしっかりと繋がっていることが分かる。

3.2 『第3部』における故郷像

チッソ東京本社座りこみ抗議のために、「東都」(P10)、「みやこ」(P11)、「満都」(P13)の東京に出た水俣病患者川本輝夫らの行動は、「出郷」(P117、下線部分は論者による。以下同様)であり、在京中、思い出す「故郷の渚」(P129)、「故郷に待っているものたちのために」(P145)などは、いずれも、具体的な「空間」(space)としての「故郷」である。

次に「場所」(place)としての「故郷」を見てみよう。「故郷水俣を脱出、離脱」(P10)と言い、「このまま故郷に帰れません」(P13)。というのは、座り込み行動が「水俣市とチッソの恥と業を、さらには日本下層民の恥と業を、みずからわが身とひきかえに晒しつつけるものたちであるからで」(P13)、「故郷の認識によれば非人になる」(P14)からである。いわゆる「地域共同体」(P215)の故郷水俣からは好ましくないと思われる行動に属している。なお、この共同体には、「故郷から分離上昇している階層」(P114)と言われる「暁の星」(P114)と、「故郷に埋もれて終るその他大勢組と素封家」(P114)と言ったような、階層的差別が生じているのである。

最後の「居場所」の大半は、異郷の東京に来て、感じたり対照に取上げられたりする「故郷」ばかりである。例えば、「そのような建物群の上の空とお月さまが、故郷とつながっているということは、かえってあの無常観のごときものを徐々に感じさせてもいた。もうすっかり夕昏めいてきた東京の空をみながら、ひとびとは、ひとつ

の感慨を抱きながら歩いていた。」(P122)。また、「カメラの奥に彼らがそのときふかぶかと覗き見たのは、つまりは故郷の心」(P141)であり、それが「死んだ母たちを含めた故郷の、いずこへも行きなずんでいるこのような魂の世界だった」(P144)とされ、「故郷の心を自分の魂にして箱車に乗せて、ここの都まで曳いてきたのだ」(P271)。そして東京で思い出された「故郷よとおもえば、どっと心がやつれてきた」(P270)り、「ひとたび出郷してみれば、あの「高漂浪きのくせ」が、ひつついてしまったような、たがいの目つきになってきた」(P270)。結局、水俣病患者川本輝夫らのように、「ひとしなみな水俣病世界から出郷し、出郷したとて、他郷ならぬ水俣病の陰陽世界の、涯から涯をゆきつもどりつすることになる」(P117)という水俣病患者である宿命から逃れることができない。この病気は、まさしく川本輝夫が「病んでみろ、病み切れんぞこの病は。一生かかっても、二生かかっても」(P20)と嘆き出したような病気である。

このように、『第3部』で触れた故郷は、「空間」、「場所」、「居場所」を兼ね備えた意味を持っており、多層的な故郷像が浮き彫りにされている。

3.3 古今・東西空間を対比

『第3部』では、古今・東西(東京と水俣)の対比を通して、近代化に毒された日本の弊害に関わる文明批判と、自然尊重・生類平等の思想が明らかにされている。

3.3.1 文明への批判と自然への尊重

「現世の世が明けることをわたしはかすかに嫌悪する」(P11)と自己表明した語り手が、「もはや物量そのものと化し、無差別殺戮用凶器そのものと化した自動車やトラックたちの暴走拠点であり」(P10)、「土の中のあらゆる生命を引きくだき、にんげんをくだく轟音」(P10)の生じた東京駅に着くと、「音の巨大なミキサーの中にのみこまれた」(P10)と感じた。それに対して「このような騒音都市の将来の宰相は、最高度に鍛錬された音感の持主でなけれ

ばならず、(中略)この都市を荘厳な一大交響楽都市として営むことをもって、民衆へのアピールとすることだろう」(P293)と語り手が皮肉に言っている。また、その目標を達成するために、「民衆の音楽的感性や日本的叙情性などというものを徹底的にすり潰し、変質させる必要がある」(P293)ったり、「進歩する近代文明の中でもっとも光栄をきわめるためには、音感的鍛錬度の極限に達せねばならない」(P293)と提言したが、「数々の風土記を生みなしていた」(P294)この関東平野には、「風土記の時代がこうして終」(P294)ったり、「この都市もまだ生きているものたちの墓場だった」(P296)と断言を下した。このように、古(『風土記』)今(近代文明)を対比させながら、自然とともに共生し、それに溶け込んだ古き時代への懐旧、生類(土の中のあらゆる生命、人間)への尊重が意図的に描かれている。

3.3.2 生類平等

東京にきている水俣病患者を見分けるには、「漁師たちは東京にきて、いつもまぶしそうな、くろいつぶらなまなざしでみとめていた。(中略)東京人と水俣の漁師たちとのあきらかな見わけは、まなざしの色をみれば画然としていた」(P37)とされている。例えば、漁師の目に映った東京人のイメージは、「東京の人間は、隣ん者と、ものをいわんとばい。電車の中でも、ポケットに手ばかり突込んでものいわんとばい」(P40)というものになる。一方、語り手が見た水俣の漁師たちは、「凡庸で名もないふつうのひとびとの魂が、そのようなところへ到達する。哲学も語らず文学や宗教も語らず、政治も語らず、道徳などというものも語ったことのないひとびとが何でもなくこの世でいちばんやさしいものになって死ぬ。自分がそのようにやさしいものになったことを知らないで死ぬ」(P229)と、素朴な人間性を評価している。その後、「<東京>は患者たちにとって、いかなる意味においても、つねにかわらぬある永い冥土への旅の、一里塚にしかすぎなかった」(P117)と結論づけた。なお、決して絡み合うことのない東京と水俣のようだが、語り手にしては、「水俣も東京もひ

とつので間に溶けあうのだ」(P317)と、負い目ばかりを抱えるのが必ずしも水俣の方ばかりではないことへの予感を述べている。『第3部』の重点とされた東京座り込み抗議活動のことを、本文では「水俣病患者らによる〈チッソ東京本社座りこみ〉とはなにか。この国の近代と前近代のはざまに出現した、さまざまの幽霊奇譚でもあるのです」(P42)と、最初から位置づけている。その中にいる都会東京の人間も水俣病患者も、語り手の目に生類平等のように見えるのである。

3.4 『苦海浄土』に底流する故郷との対話の移り変わり

長期にわたり、書かれた『苦海浄土』を故郷との対話に据えて、各部ごとに考察してきた。そこで、『苦海浄土』に底流する故郷との対話の移り変わりが見られる。

『第1部』での故郷についての言説は近代に対する姿勢がまだ明確にされていないゆえ、故郷像には「空間」、「場所」、「居場所」と言った描き分けはまだ明確には見受けられない。故郷は、シンボルとして同郷人を引き寄せるものであり、文明に対する論説に相容れない矛盾が所々見られる。また、登場人物に代わり、結末に挙げた結語は一体語り手の感想なのか、あるいは主要人物の持つ感想なのか、その不透明な点も故郷の主題と関わっており、曖昧さが目立っている。

『第2部』に至ると、「空間」、「場所」、「居場所」を兼ね備え、多層的な意味を持つ故郷像が明確に形成された。「空間」、「場所」、「居場所」を取り立てて区別せずに描いた『第1部』の故郷像²⁷と比べると、『第1部』のように故郷は単純にシンボルとして同郷人を引き寄せる記号ではなくなり、故郷への思いの深化により、文明への対抗がますます明確になり、文明への激怒、憤慨も過激化、先鋭化されてきたのである。ただし、『第2部』での故郷についての言説は、近代文明への批判と心に根付いた精神風土の二項対立から思い描いた

²⁷曾秋桂(2015)「生態文學論述中與故郷的溝通—以探討石牟礼道子《苦海浄土》為主—」『日本論叢』31P85-106 淡江大學日本語文學系を参照されたい。

ものである点は忘れてならない。このレベルでは、いわゆる人間対自然、文明対自然のような解決不能の二項対立が生じているだけで、その点では「近代」という限界を乗り越えることはできていなかった。

『第3部』でも『第2部』と同じく「空間」、「場所」、「居場所」を兼ね備えた、多層的な故郷像が見られる。ただし、近代文明への批判と心に根付いた精神風土の両端から思い描いた『第2部』とは違い、近代文明への批判よりも、心に根付いた精神風土の価値の方がより強調されている。故郷に関わる精神風土の強調によって、単純な人間対自然、文明対自然の二項対立の根源となるものが実は現在の文明を成り立たせている近代的価値観であり、それを乗り越えるものとして、心に根付いた精神風土の価値が提起されていると言えよう。

上述のような故郷との対話の移り変わりは、時間を追いながら部ごとに細かく見られるものであり、それが作者の故郷への認識の深まりとも関係していると思われよう。

4. 結論

以上のように、文化的に自然と人間との関わりを研究する方法として近年、注目されているネイチャーライティング (nature writing) を援用し、『苦海浄土』(全3部)の考察を試みた。故郷像を通観し、総纏めにすると、確かに石牟礼道子が述べた「自分のこころのなかにある世界というのは、(中略)それぞれの故郷というものがある。私の場合、すべてのことが水俣に凝縮されるわけですが」²⁸という言葉と故郷が呼応し、「空間」、「場所」、「居場所」を兼ね備え、多層性を持つものだということが言える。

渡辺京二によると、『第一部』が運動以前の無垢のなかで、『第三

²⁸それは1973年12月に刊行した『潮』に掲載した上野英信と交わした対談に触れた言葉であり、現に『苦海浄土』来し方行く末(2004)『石牟礼道子全集・不知火第三巻』藤原書店 P517 に収録されている。

部』が運動の頂点の輝きにおいて書かれたとすれば、『第二部』は、運動が分裂と混乱に陥った時期に、(中略)それが苦渋のうちに最後の力をふり絞るような力業となったのは当然である」²⁹という。運動の頂点の輝きにおいて書かれた『第3部』には、文明対故郷の対抗に力点が置かれた『第2部』とは違い、故郷と心に根付いた日本の精神風土との絆が強調されている。

公害の告発文学として知られた『苦海浄土』の作者石牟礼道子を文明批判者、反近代思想家としている³⁰岩岡中正の説には賛同するが、石牟礼道子が『苦海浄土』(全3部)を通じて提起しようとした文明観は、所謂人間対自然、文明対自然という二項対立による文明批判、反近代思想ではない。作品を通じて自己形成をしていった過程で、『第2部』では故郷との対話を通して、日本古来からの説話、民話、詠歌をバネに、近代とは何かを洞察しようとした石牟礼道子の格闘があることは忘れてはならない。さらに、文明批判者、反近代思想家として自己形成を経た後、『第3部』では心に根付いた日本精神風土への回帰も、決して見落とすことが出来ない大事な観点である。

また、『第3部』では東京座り込み抗議活動を「この国の近代と前近代のはざまに出現した、さまざまの幽霊奇譚でもあるのです」(P42)と最初から位置づけた所から見れば、石牟礼道子は近代と前近代を必ずしも二項対立的なものだと捉えていないことが示唆的である。通常なら、現代の文明批判は、結局、二項対立的であり、反原発やエコロジーも同じ次元での批判であり、文明賛美と文明批判は、その根底には近代合理主義あるいはメリトクラシーを共有している点で、現象の両面にすぎない。しかし、明治＝近代として無条件に肯定され、讃美され、神話化されたものとした近代を、石牟礼道子は『第2部』で触れた「後もどりできない巨大な非人間的魔性」と

²⁹渡辺京二(2013)『もうひとつのこの世』弦書房 P162

³⁰岩岡中正「石牟礼道子における文明と社会—『天湖』を中心に」(2003)『九州法学学報』P19

し、それに日本の原文明である説話、民話、詠歌の世界を対置させている。そこで、日本の原文明である説話、民話、詠歌の世界の存在という発想自体を、第三項として捉えられよう。近代と反近代の二項対立における第三項の存在の認識は、『第2部』から『第3部』へと脈流し、その第三項を克服する方法として、心に根付いた日本精神風土への回帰が提起され、深化している。

マイケル・ヤングのメリトクラシー論のように、欧米でも発想としての「近代」への批判は、未だ途についたばかりであるのに対して、石牟礼道子が『苦海浄土』で描こうとしていた、近代という魔性との格闘、第三項を認識する可能性の探究は、きわめて先駆的な業績とも言えよう。

(本論文は、105年度科技部専題研究計画(MOST 105-2410-H-032-047)による研究成果の一部である。)

テキスト

(2014・初 2004)『石牟礼道子全集・不知火第二巻』藤原書店

(2004)『石牟礼道子全集・不知火第三巻』藤原書店

主要な参考文献

ウルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳(2011・初 1998)『危険社会新しい近代への道』法政大学出版社

篠田知和基(1999)「環境文学から見たフランス文学」『古屋大學文學部研究論集文學』45号名古屋大学文学部

野田研一(2003)『交感と表象』松柏社

岩岡中正「石牟礼道子における文明と社会—『天湖』を中心に」(2003)『九州法学学報』

渡辺京二(2004)「石牟礼道子の世界」『石牟礼道子のコスモロジー』藤原書店

池澤夏樹「解説」(2014・初 2004)『石牟礼道子全集・不知火』第2巻藤

原書店

石牟礼道子「あとがき」(2014・初 2004)『石牟礼道子全集・不知火第二卷』藤原書店

山里勝己(2006)『場所を生きる-ゲーリー・スナイダーの世界』山と溪谷社

岩岡中正編(2006)『石牟礼道子の世界』弦書房

荒井宏祐(2007)「J. J. ルソーにおけるネイチャーライティング(環境文学)」『文教大学国際学部紀要』第17巻2号文教大学

池澤夏樹編(2011)『世界文学全集第3集苦海浄土』河出書房新社

喜納育江(2011)『〈故郷〉のトポロジー-場所と居場所の環境文学論』水声社

山里勝己(2011)「地名の詩学--『アメリカ』の地理表象をめぐって」野田研一編『〈風景〉のアメリカ文化学』ミネルヴァ

マニユエル・ヤン(2012.2)「負債資本主義時代における黙示録と踊る死者のコモンズ」河出書房新社編集部編『歴史としての3・11』河出書房新社

渡辺京二(2013)『もうひとつのこの世-石牟礼道の宇宙』弦書房

金大偉監督(2013)『花の億土へ』藤原書店

(2013)『北海道新聞』2013年4月14日

臼井隆一郎(2014)『『苦海浄土』論-同態復讐法の彼方』藤原書店

曾秋桂(2015)「生態文学論述中與故郷的溝通-以探討石牟礼道子《苦海浄土》為主-」『日本論叢』31P85-106 淡江大學日本語文學系

曾秋桂(2016)「ネイチャーライティングの観点から読み解く石牟礼道子『苦海浄土』-故郷との対話を中心に-」『比較文化研究』124 日本比較文化学会